



山元 眞

人の生死にかかわることであれば、それは一刻も早く、しかもできるだけ多くの人に知らなければならぬ。そのような情報を流す側は、あらゆる広報手段を講じる。テレビ、ラジオ、新聞、電報、電話、あらゆる出版物、そしてインターネット。情報が大切であればあるほど、情報の流し手は工夫するものである。

教会の歴史は広報の歴史でもある。より厳密に言えば、福音宣教の歴史である。福音は実には人の生死にかかわることである。教会はイエス・キリストによって伝えられた救いのメッセージを伝えることをその第

一の使命とする。福音の最初の伝達者である使徒たちは命をかけて救いのメッセージを伝えた。殉教者たちも、しかし。数えきれないほどの多くの人たちが福音を伝えたから、今の教会があり、今の「わたし」がある。

現代の教会に目を向けてみる。組織としての「教会」ではなく、神によって呼び集められた民としての「教会」として

て考えてみる。一体教会は今、何を伝

えようとしているのだろうか。伝えようとしていることは、絶対に必要なこと、絶対に伝えなければならぬことなのだろうか。果たして「福音」は現代の人々にとっても「福音」になっているのだろうか。

教会も高齢者社会

若者の教会離れ、教会の若者離れが話題になって久しい。確かに若者

たちは、これからの教会を支えていく貴重な存在である。彼らの未来を考えると、考えなければならない。しかし、今、現在、教会を支えているのは年配の方々である。主日のミサや週日のミサに参加している人たちは高齢者が多い。祈りのサークルや聖書研究会の参加者にしても、さまざまな形で教会に奉仕する人たちも高齢者の方が多い。ミサに参加しても、朗読は

センジャー。彼らが、子どもに、孫に信仰を伝えていく。じいちゃん、ばあちゃんがつらつと生きている姿、そこから福音が伝わっていくのではないだろうか。実際、カトリック新聞や教区報の読者も高齢者が多いのではない。本紙の「声」の欄を見ても分かる。福音は彼らの生命に直結している。人生を振り返りながら、何が大切なのかを吟味しているのである。

「生きるために福音は絶対に必要」だと

絶対に伝えなければならないのか

感じているのは彼らなのだ。彼らに福音がもっとしっかり伝わるように工夫する余地がある。

広報は足元から

ある教会でインターネットのホームページを作った。「私たちの教会をインターネットで見ることがができます」というお知らせを聞いたある人は「うちのテレビのどのチャンネルで見ることができの？」と言った。笑い話だろうか。何のためにインターネットを利用するのだろうか。そこで何を伝えるのだろうか。「教会に来てみませんか」という呼び掛けであろうが、果たして、それで実際に教会に来た人を受け入れる準備は整っているのだろうか。救いを求めている人は多いのに、最後の詰めが甘いように思える。福音は素晴らしい救いのメッセージ。人が人として生きていく上で、ぜひとも必要なものである。絶対に伝えなければならないものである。「一般のメディア」を利用して福音を伝えることも結構である。しかし、最も直接的なメディアである、人と人のかかわりを今一度見直す必要があるのではない。か。「わたし」にとって福音はなくてはならないもの、絶対に必要であることに気が付かないかぎり救いのメッセージは伝わっていない。五月九日は世界広報の日。

(福岡教区司祭)